

伏見城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一八―二

伏見城跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡

2018年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、JR奈良線第二期複線化事業に伴う伏見城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

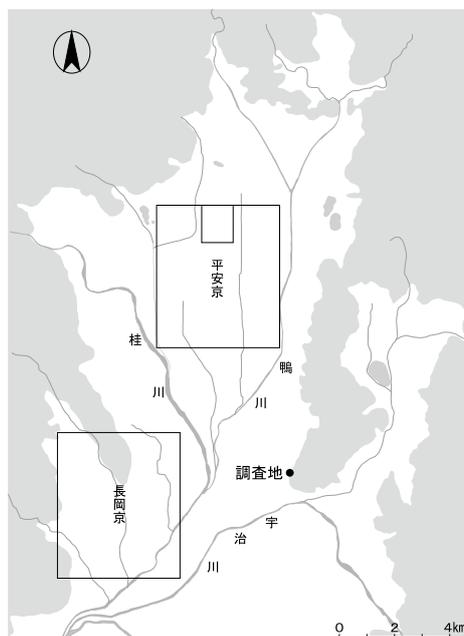
平成30年8月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡（京都市番号 16 F 293）
- 2 調査所在地 京都市伏見区桃山長岡越中東町
- 3 委 託 者 清水建設株式会社 関西支社 取締役 専務執行役員 支店長 池田耕二
- 4 調査期間 2018年4月16日～2018年4月25日
- 5 調査面積 8 m²
- 6 調査担当者 松永修平
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 松永修平
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 調査地の歴史的環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構	8
4. 遺 物	11
(1) 土器類	11
(2) 瓦類	11
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区全景(北東から)
	2	1区南西壁断面(北東から)
	3	2区全景(北東から)
	4	2区南西壁断面(北東から)
図版2 遺構	1	3区全景(北東から)
	2	3区南西壁断面(北東から)
	3	4区全景(北東から)
	4	4区南西壁断面(北東から)

挿 図 目 次

図1	調査区位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景（北東から）	2
図3	作業風景（北東から）	2
図4	調査地遠景（北東から）	3
図5	調査地遠景（南西から）	3
図6	調査地及び周辺の調査地点（1：5,000）	4
図7	土層柱状図（1：40）	7
図8	1区・2区実測図（1：40）	9
図9	3区・4区実測図（1：40）	10
図10	土器実測図（1：4）	11
図11	瓦拓影及び実測図（1：4）	11

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	12

伏見城跡

1. 調査経過

今回の調査は、JR奈良線第二期複線化事業に伴う発掘調査である。調査地は、京都市伏見区桃山長岡越中東町で、伏見城跡にあたる。調査地周辺は、大名屋敷地の一画で、細川忠興の屋敷地に比定されている¹⁾。そのため伏見城期を中心とした遺構が検出されることが推定されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）から発掘調査の指導が西日本旅客鉄道株式会社になされた。調査は、西日本旅客鉄道株式会社からJR奈良線複線化事業を請け負った清水建設株式会社関西支店の委託を受け、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行うこととなった。今回の調査は、調査範囲が非常に狭く、検出した遺構の性格を明らかにすることが困難であると考えられたため、安土桃山時代の整地層を確認することで当時の土地造成の構造を把握するためのデータ取得を大きな目的とした。

調査区は、JR奈良線の第一御陵踏切・第二御陵踏切間の線路沿いの東側に4箇所を設定し、北から1区とした。調査面積は各2㎡、合わせて8㎡である。全ての調査区で、安土桃山時代の整地

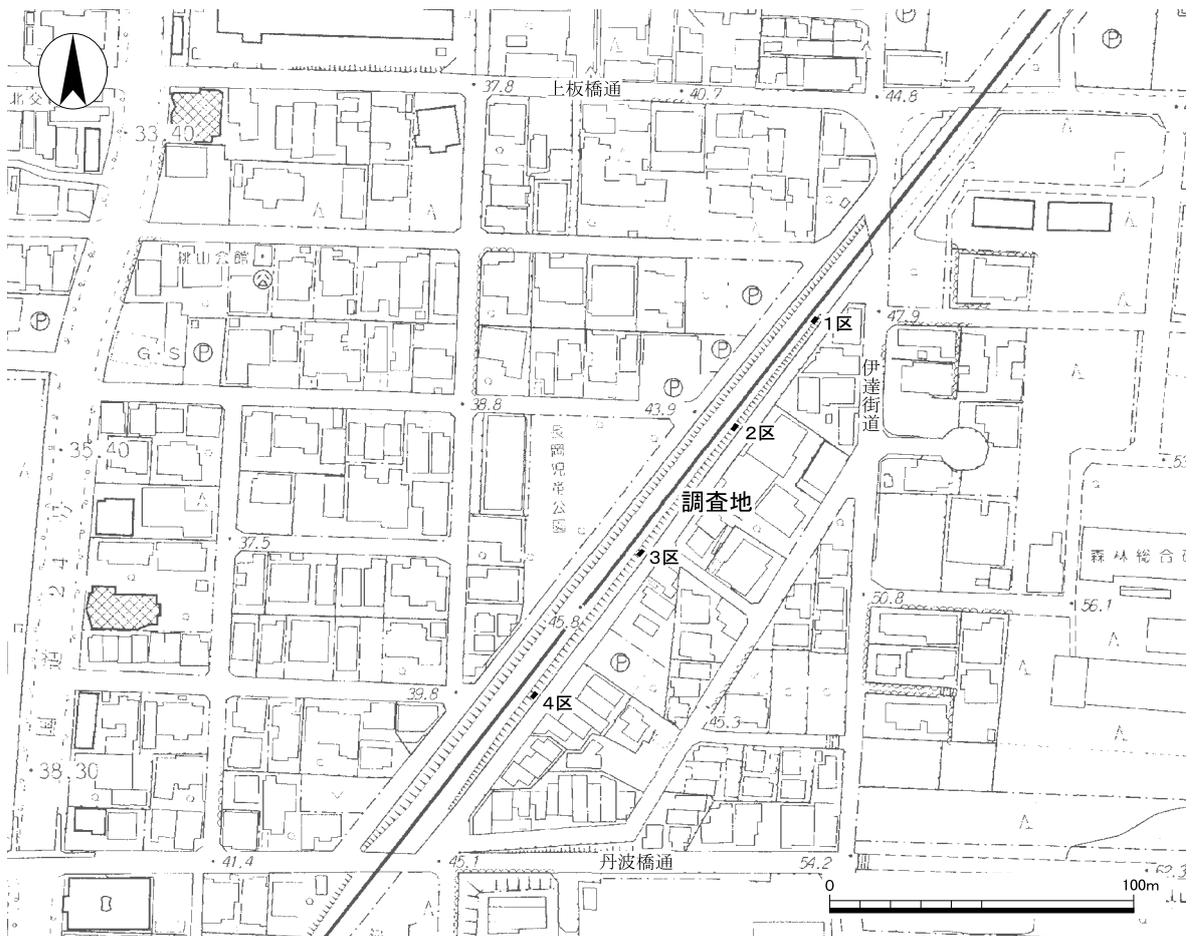


図1 調査区位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景（北東から）

層を確認した。また、2区では埋土に焼土や炭を含む土坑を検出した。

調査は、2018年4月16日から開始した。調査区ごとに遺構検出、写真撮影、実測作業を行った。掘削土は全て調査区横に仮置きし、調査終了後埋め戻し、現状に復した。4月25日に現場での作業を全て終了した。

また、調査中には適宜、文化財保護課の指導を受けた。

註

- 1) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』文理閣 2001年

2. 位置と環境

(1) 調査地の歴史的環境

今回の調査地は、伏見城の城下町の一面に位置する。伏見城の歴史は、大きく3期に分けることができる。第1期は、天正20年(1592)に豊臣秀吉が指月の丘に隠居所として屋敷を造営し、秀頼の誕生を契機として本格的な城郭へ改築した指月伏見城期である。文禄5年(1596)の大地震により城が倒壊したことで、秀吉は場所を木幡山に移し城郭を再建する。これが第2期の豊臣木幡山伏見城期である。秀吉の死後、伏見城は実質的に徳川家康の支配下となるが、関ヶ原の戦いの前哨戦の際に西軍の攻撃を受け落城する。しかし、伏見城の位置が京都と大阪を結ぶ立地的な重要性を有していたことから、家康はすぐに伏見城の再建を始め、本格的な拠点として整備を行った。これが第3期の徳川木幡山伏見城期である。この再建された伏見城で、家康・秀忠・家光が將軍宣下を受けている。その後、伏見城の役割は、京都の拠点としての二条城の築城や大坂夏の陣での豊臣家の滅亡により失われ、元和9年(1623)に廃城となった。

伏見城城下町は、南に宇治川が位置し、東・北・西は土塁と堀で構成される惣構をめぐらしていた。城下町は、桃山丘陵西斜面地を中心に広がる大名屋敷地と、その西側の町人地に大きく分かれる。調査地周辺の桃山丘陵の西側斜面は大名屋敷地となり、東から西へ下がる斜面地に雛壇状の造成を行い、平坦面が作られたことが確認されている。

今回の調査地は、周辺の雛壇状地形とは様相が異なり、東側の伊達街道、北側の上板橋通と南側の丹波橋通に囲まれた範囲の窪地状の地形に位置している。なお、当地は長岡越中守(細川忠興)の屋敷地に推定されており、現在の調査地一帯の地名の由来となっている。



図4 調査地遠景(北東から)



図5 調査地遠景(南西から)

(2) 周辺の調査 (図3、表1)

伏見城跡では、数多くの発掘調査および試掘・立会調査が行われている。以下に、調査地周辺で行われた調査の主な成果について述べる。

調査1では、古墳の墳丘、安土桃山時代の井戸や瓦溜、江戸時代の礎石建物や墓坑を検出している。

調査2では、礎石建物、井戸、溝などを検出している。出土遺物、遺構の重複状態などから、遺構は安土桃山時代から江戸時代初期と江戸時代中期以降の2時期に大別でき、さらに安土桃山時代から江戸時代初期にかけては再整地される前後に分けることができる。また、整地層は最大で4m以上堆積していることが確認されており、整地土から古墳時代の須恵器や円筒埴輪なども出土している。

調査3では、伊達街道と並行する南北方向の石垣、石組溝、路面、南北2間×東西7間以上の礎石建物を検出している。この礎石建物の遺構は熱により変色していることから、調査地周辺で火災があったことが窺える。

調査4は、上板橋通と伊達街道に面した道路拡幅に伴う調査で、上板橋通と伊達街道の側溝並びに大名屋敷を区画する東西方向の石垣・石組溝、南北方向の石垣・石組溝を検出している。特に東西方向の石垣・石組溝は約170mにもわたっている。出土した遺物から、関ヶ原の戦い以後に徳川家康に再建された伏見城の時期のものと考えられている。

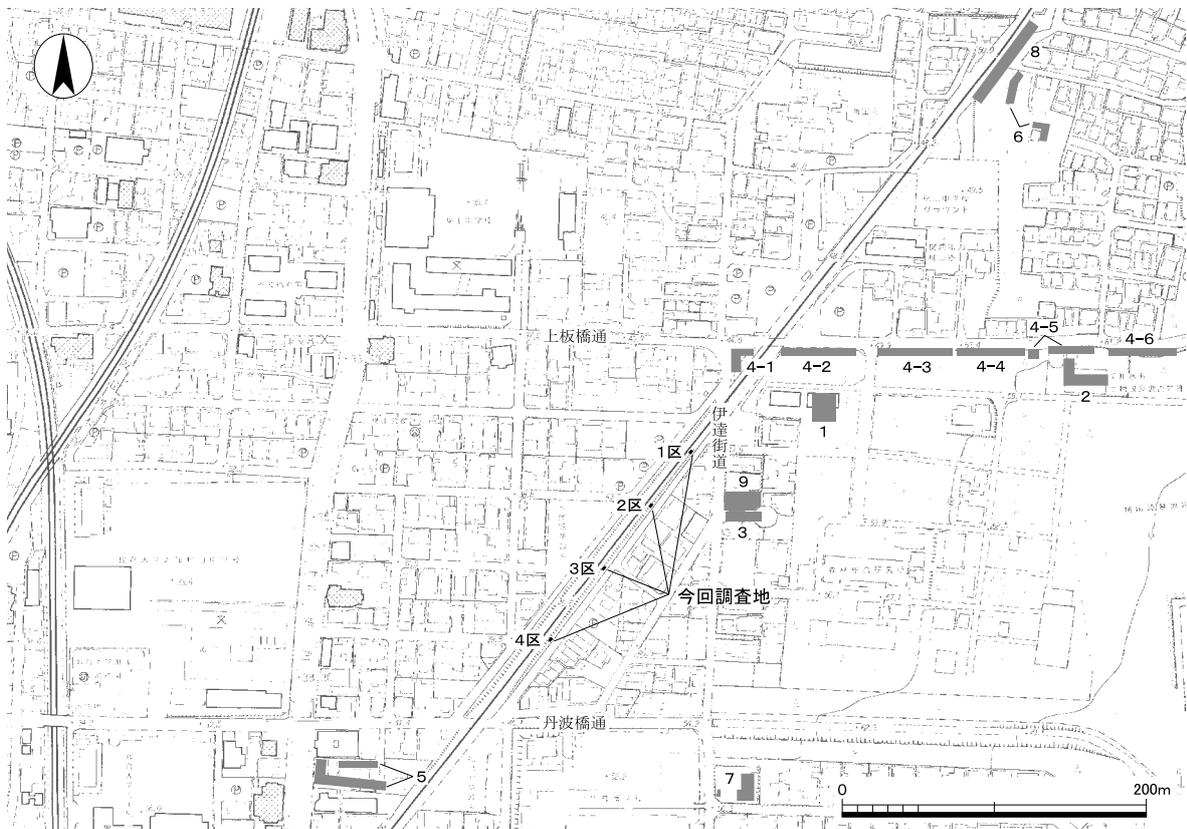


図6 調査地及び周辺の調査地点 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

調査番号	所在地	調査期間	調査面積	検出遺構	検出遺物	文献
1	桃山町永井久太郎	1978.10.05 ～12.05	300㎡	[古墳時代] 古墳の墳丘 [伏見城期] 井戸、瓦溜 [江戸時代] 礎石建物	[古墳時代] 土師器、須恵器、埴輪 [伏見城期] 金箔瓦 [江戸時代] 土師器、銭貨など	1
2	桃山町永井久太郎 56	1986.12.01 ～1987.01.16	120㎡	[安土桃山～江戸時代] 礎石建物、 井戸、溝など	[古墳時代] 土師器、須恵器 [安土桃山～江戸時代] 土師器、陶 器、瓦類、鉄製品	2
3	桃山町永井久太郎 59-2	1988.11.21 ～12.10	250㎡	[安土桃山時代] 南北石組溝、犬 走り、路面など	[安土桃山時代] 土師器、陶器、炭 化米、鉄製品、弾丸など	3 ・ 4
4	桃山最上町、 桃山町永井久太郎	1998.07.06 ～1999.03.19	300㎡	[安土桃山～江戸時代] 東西石垣、 石組溝、南北石組溝など	[古墳時代] 埴輪、須恵器 [安土桃山～江戸時代] 土師器、陶 器、銭貨、石仏、瓦類など	5
5	桃山福島大夫西町 1-2	2007.09.25 ～11.28	597㎡	[安土桃山時代] 石組溝、石垣基 礎、礎石、柵列など	[安土桃山時代] 土師器、施釉陶器、 焼締陶器、瓦類（佐竹氏の家紋をも つもの）	6
6	桃山政宗15-1他	2012.11.12 ～12.15	282㎡	[安土桃山～江戸時代] 建物、井 戸、土塁、整地層	[安土桃山～江戸時代] 土師器、瓦 類、金属製品、石製品	7
7	桃山町島津47-25	2015.09.28 ～10.20	168㎡	[安土桃山時代] 石垣、石垣抜取 跡	[安土桃山時代] 土師器、瓦器、施 釉陶器、焼締陶器、瓦類（金箔瓦）、 石製品	8
8	桃山町政宗15-3	2017.06.01 ～06.28	250㎡	[安土桃山時代] 土塁 [江戸時代] 土坑	[安土桃山時代] 瓦類 [江戸時代] 施釉陶器、土製品	9
9	桃山町永井久太郎 59-7	2017.07.18 ～08.25	68㎡	[安土桃山時代] 南北石垣、石組 溝	[安土桃山～江戸時代] 土師器、瓦 類、炭化米、金属製品	10
10	桃山長岡越中東町	2018.04.16 ～04.25	8㎡	[安土桃山時代] 土坑、整地層	[安土桃山時代] 土師器、瓦質土器、 瓦類	本 報 告

文献一覧（表1 周辺調査一覧表）

- 1 「伏見城跡1」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2 平方幸雄「伏見城跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 3 久世康博「伏見城跡（FD32）」『京都市内遺跡試掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 4 久世康博「伏見城跡1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 5 小松武彦「伏見城跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 6 平田 泰・布川豊治『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-10』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 7 モンペティ恭代『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-17』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年
- 8 山下大輝『伏見城跡・桃山古墳群 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-10』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 9 中谷正和『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017-3』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
- 10 清水早織「IV 伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年

調査5では、安土桃山時代の石組の大和街道東側溝、石垣基礎、礎石、柵列などが検出されている。調査地は佐竹氏の屋敷地に推定され、その家紋である五本骨扇に月丸紋を瓦当文様とした軒丸瓦が多数出土している。

調査6では、惣構の北辺土塁の一部や建物遺構、井戸などを検出している。出土した瓦の中に鳥文軒丸瓦や竹の葉文軒平瓦があり、金箔が貼られるものも見ついている。瓦の文様や絵図から伊達氏の屋敷地と考えられている。

調査7は、伊達街道の東、丹波橋通の南に位置する地点の調査である。伊達街道と屋敷地を区画する南北方向の石垣を検出している。この石垣は現在の伊達街道の東辺とほぼ同位置にあたり、桃山丘陵の斜面地を雛壇状に造成するために構築された石垣であると考えられている。

調査8は、惣構の北辺土塁の調査である。この調査により伏見城惣構の北辺土塁の構造が初めて明らかとなり、また土塁の高さが4.2m以上あることが確認された。

調査9は、調査3の北側に隣接し、調査3で確認された石垣や石組溝延長部分を検出している。

参考文献

桜井成広『豊臣秀吉の居城－聚楽第と伏見城－』 日本城郭資料館出版会 1971年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7)

現地表面の標高は、1区から4区にかけて北東から南西方向に下がっており、1区が46.1m、2区が45.0m、3区が43.8m、4区が43.3mである。

基本層序は、現代盛土、その直下に安土桃山時代の整地層が堆積し、その下が地山となる。整地土は主として7.5YR4/4～4/6 褐色の砂泥である。

1区では現代盛土が約0.9m、安土桃山時代の整地層が約0.4m、地山となる。2区では現代盛土が0.8～1.0m、安土桃山時代の整地層が約0.6m、地山となる。3区では現代盛土が0.8m、安土桃山時代の整地層が約0.9m、地山となる。4区では現代盛土が1.3m、安土桃山時代の整地層が0.4m以上、地山面は確認できていない。

なお、4区からさらに南の丹波橋通に向かって地表面の標高が高くなり、調査地周辺は窪地状の地形となっている。

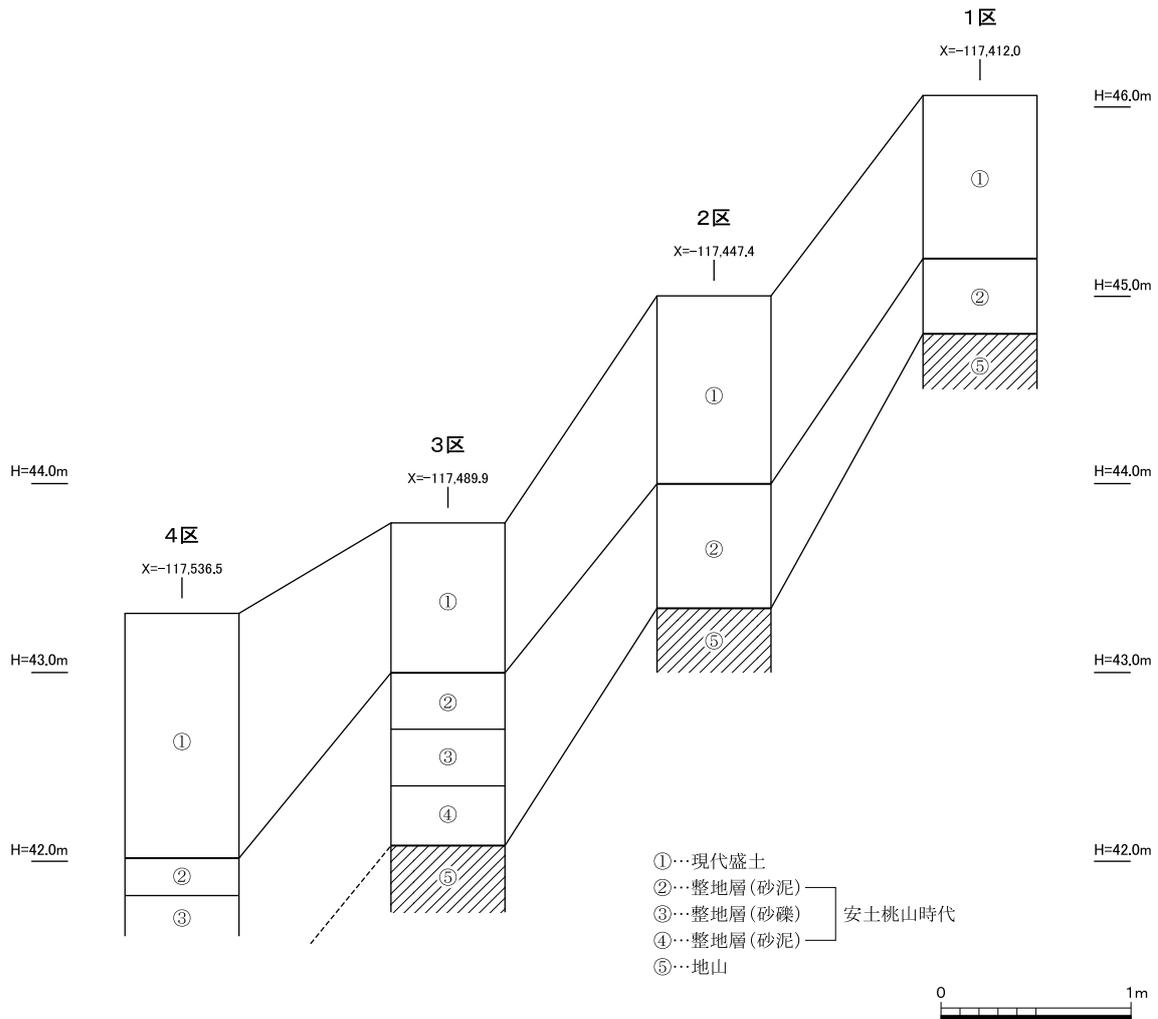


図7 土層柱状図 (1 : 40)

(2) 遺構 (図8・9、図版1・2、表2)

1区 (図8、図版1)

地表下0.9mで安土桃山時代の整地層を検出した。整地層上面の標高は、44.9～45.1mでわずかに北東から南西に向かって傾斜する。整地層上面で遺構は確認できなかった。

調査区南半で断割調査を行い、地表下1.3mで地山を確認した。地山上面の標高は44.7～44.8mで、整地層上面と同様に東から西に向かって傾斜している。

2区 (図8、図版1)

地表下1.0mで安土桃山時代の整地層を検出した。整地層上面の標高は、44.0～44.1mであり、東から西へわずかに傾斜している。

また、調査区の西側で土坑1を検出した。検出面での規模は1.5×0.4m、深さは約0.9mあり、調査区外へ広がる。土師器、瓦質土器、瓦類が出土した。瓦の中には焼けた瓦も含まれていた。埋土には焼土や炭を含む。

調査区南半で断割調査を行い、地表下約1.4mで地山を確認した。地山上面の標高は43.3mである。

3区 (図9、図版2)

地表下0.8mで安土桃山時代の整地層を検出した。整地層上面の標高は43.0mである。整地層上面で遺構は確認できなかった。

調査区南半で断割調査を行い、整地層が3層に分かれ、砂泥質と砂礫質の土を交互に積んでいることを確認した。整地層は南東から北西に向かって盛土されている。地表下1.7mで地山を確認した。

4区 (図9、図版2)

地表下1.3mで安土桃山時代の整地層を検出した。整地層上面で遺構は確認できなかった。

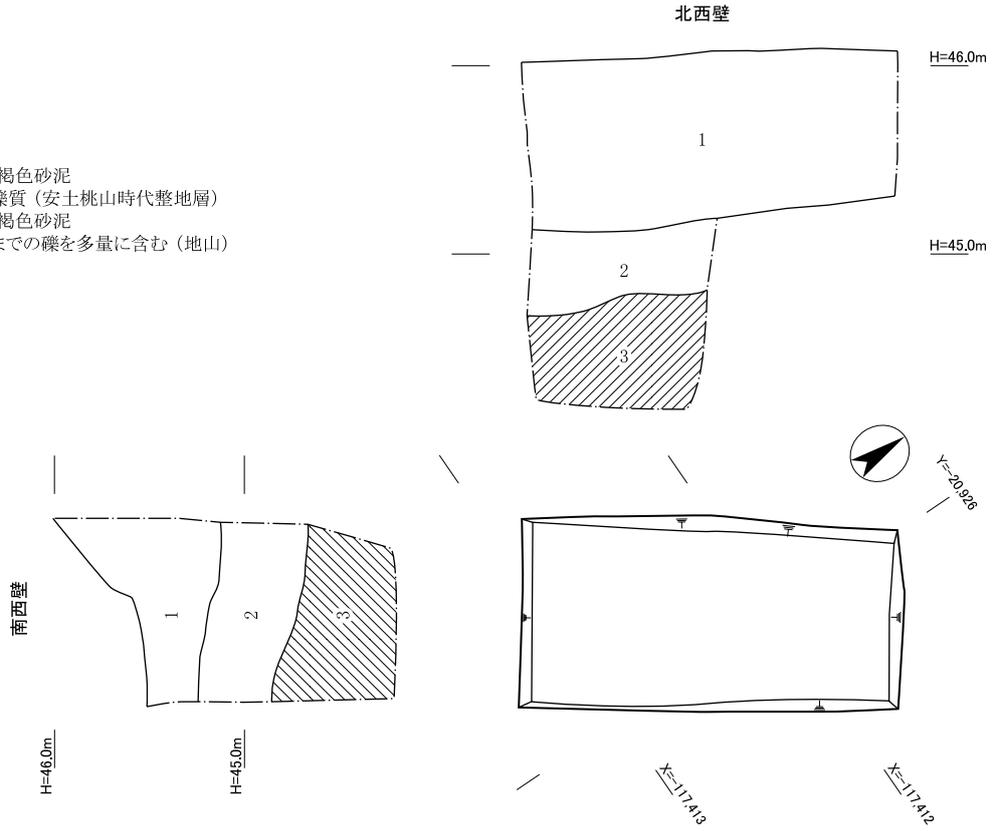
調査区南半で断割調査を行い、上下2層の整地層を確認した。上層は礫をほぼ含まないが、下層は礫を多量に含む。3区と同様に整地層上面は、南東から北西に向かって傾斜している。安全上の理由から、地山まで掘り下げることができなかった。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
安土桃山時代	整地層、土坑1	

1区

- 1 現代盛土
- 2 7.5YR4/6 褐色砂泥
下部は砂礫質（安土桃山時代整地層）
- 3 7.5YR4/6 褐色砂泥
φ 1~6cmまでの礫を多量に含む（地山）



2区

- 1 現代盛土
 - 2 7.5YR4/4 褐色砂泥
φ 4cm以下の礫が少量、炭がごく少量混じる
 - 3 10YR3/4 暗褐色シルト
φ 10cm以下の礫がごく少量、瓦片が混じる
 - 4 10YR4/6 褐色砂泥
φ 4cm以下の礫が少量混じる
 - 5 7.5YR4/4 褐色砂泥
φ 3cm以下の礫がごく少量混じる
 - 6 7.5YR4/4~4/6 褐色砂泥
φ 10cm以下の礫が上部は中量、下部はごく少量混じる
(安土桃山時代整地層)
 - 7 7.5YR4/4 褐色砂泥
φ 5cm以下の礫が混じる（地山）
- (土坑1)

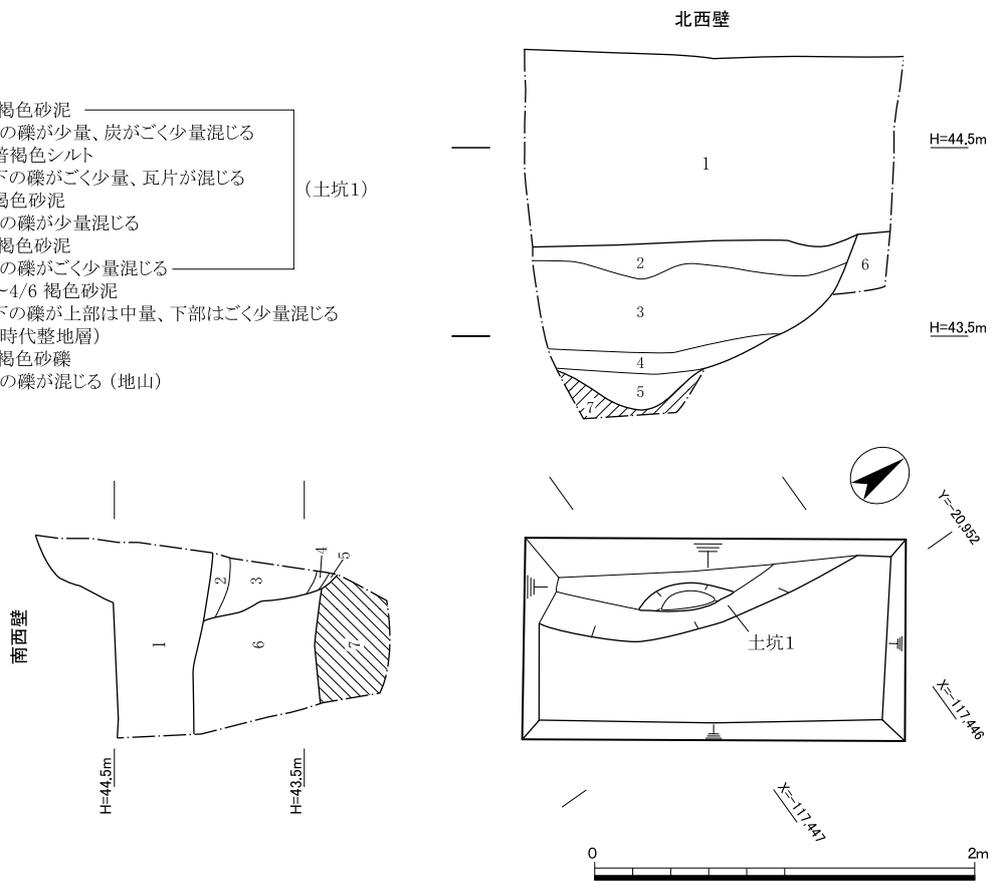
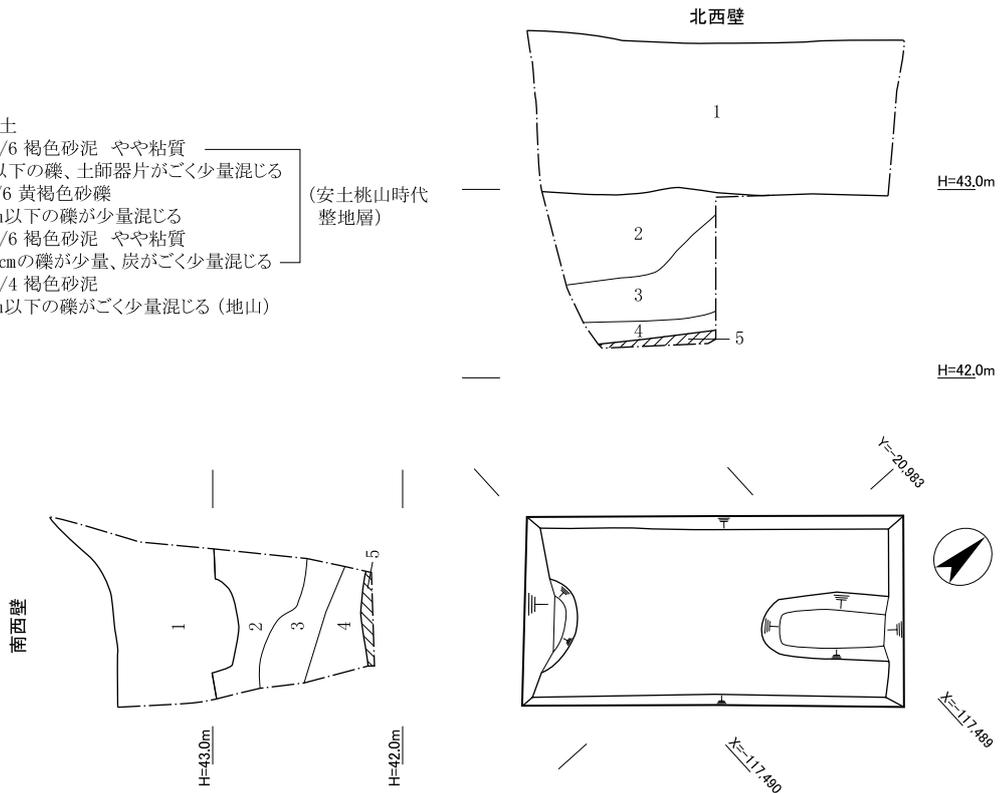


図8 1区・2区実測図 (1:40)

3区

- 1 現代盛土
 - 2 7.5YR4/6 褐色砂泥 やや粘質
φ 1cm以下の礫、土師器片がごく少量混じる
 - 3 10YR5/6 黄褐色砂礫
φ 0.7cm以下の礫が少量混じる
 - 4 7.5YR4/6 褐色砂泥 やや粘質
φ 1~5cmの礫が少量、炭がごく少量混じる
 - 5 7.5YR4/4 褐色砂泥
φ 0.5cm以下の礫がごく少量混じる (地山)
- (安土桃山時代整地層)



4区

- 1 現代盛土
 - 2 7.5YR4/4 褐色砂泥
φ 3cm以下の礫がごく少量混じる
 - 3 7.5YR4/6 褐色砂礫
φ 5cm以下の礫が多量に混じる
- (安土桃山時代整地層)

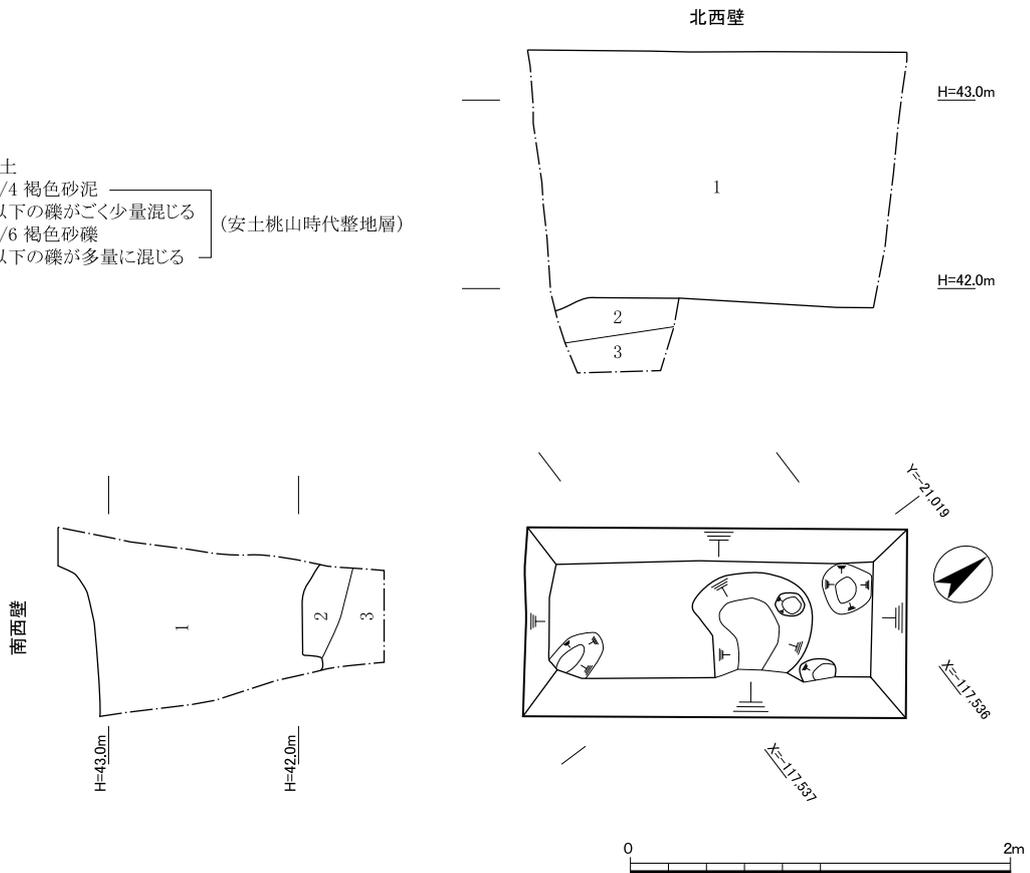


図9 3区・4区実測図 (1:40)

4. 遺物

遺物は、安土桃山時代の土器・瓦類が整理箱で2箱出土した。大半が2区の土坑1から出土した。少数の土師器片が3区の整地層から出土した。

(1) 土器類 (図7)

1は土師器の皿である。色調は7.5YR8/3 浅黄橙色である。小片であり、口径は復元できなかった。

2は瓦質土器の羽釜である。口縁はナデによる調整が施されている。胎土に雲母や長石を含み、焼成は良好である。色調はN4/0 灰色である。1・2ともに土坑1から出土した。

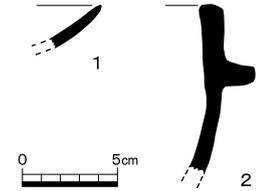


図10 土器実測図 (1 : 4)

(2) 瓦類 (図8)

瓦類はいずれも土坑1から出土した。

3は右巻き三巴文軒丸瓦である。外区に珠文22個を配する。瓦当裏面は、丸瓦との接合部周辺と下縁部にヨコナデを施す。丸瓦部凹面にはコビキ痕が残り、コビキBである。瓦当径は17.5cmである。色調は外面が7.5Y4/1 灰色～7.5Y2/1 黒色で、内面が7.5Y2/1 黒色である。

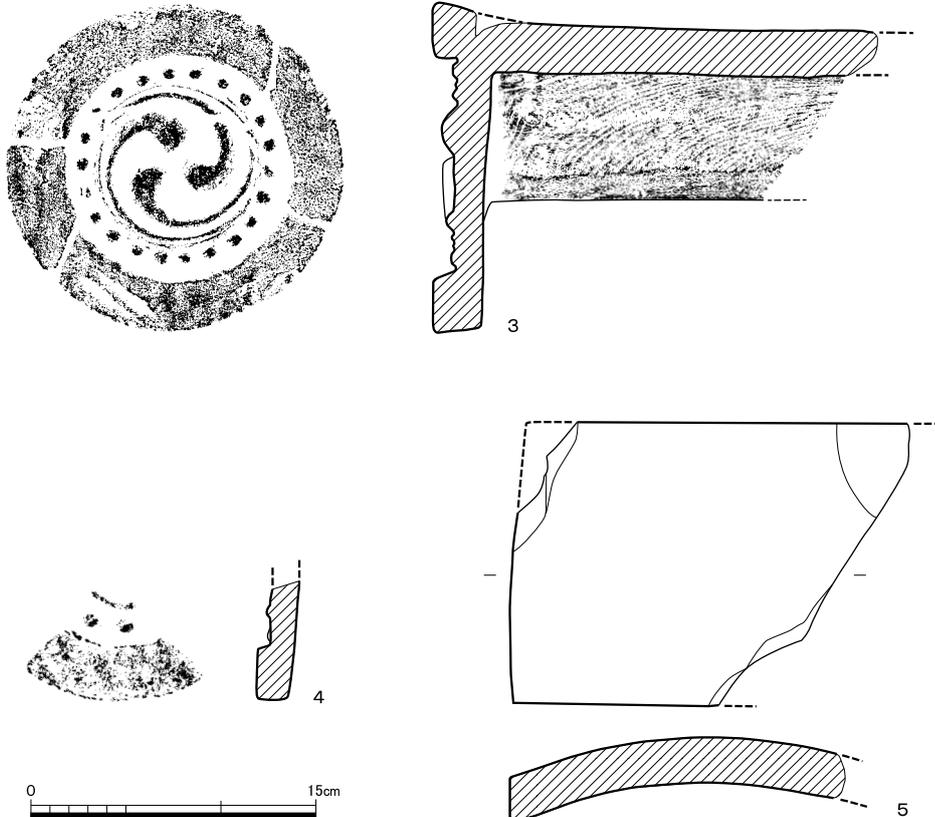


図11 瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
安土桃山時代	土師器、瓦質土器、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、熨斗瓦		土師器1点、瓦質土器1点、軒丸瓦2点、熨斗瓦1点		
合計		2箱	5点(1箱)	0箱	1箱

4は巴文軒丸瓦である。外区に珠文を配する。瓦当下半が残存する。胎土に雲母、長石を含み、外面の色調は2.5Y6/1 黄灰色である。

5は熨斗瓦である。残存長20cm、幅15cm、厚さ2.0～2.2cmである。胎土には雲母や長石、石英を含む。色調は外面が7.5Y7/1 灰白色～2.5Y5/1 黄灰色、断面は7.5Y4/1 灰色である。焼成は良好である。

5. まとめ

今回の調査地は、北側を上板橋通と南側の丹波橋通に囲まれた窪地状の地形に4ヶ所の調査区を設定し発掘調査を行った。調査の結果、すべての調査区で安土桃山時代の整地層を確認し、整地層は北東から南西に向かって傾斜していることが明らかとなった。また、1～3区では地山を確認しており、整地層と同様の傾斜をしていることから、当地の窪地状地形は旧地形、すなわち木幡山西麓に刻まれた谷地形を反映していると考えられる。

各調査区で確認した整地層の時期について考えてみたい。今回調査地の約300m南の京都府総合教育センターにおける調査¹⁾では、焼土層の上下に整地層が確認されている。その東側の桃山高校の発掘調査²⁾では、厚さ最大2mの整地層が確認された。この整地層の上面と下層で伏見城関連の遺構が検出されたが、それぞれの遺構の主軸方位は異なっている。このような整地層の上下で2時期の遺構が確認できる調査事例は少なく、ほとんどの整地層は1層で遺構も1時期のみである。桃山町永井久太郎の農林水産省敷地内における発掘調査(調査2)では、整地層が最大で4mにも及ぶことが確認されているが、その整地は1時期のものである。2017年に行われた桃山町永井久太郎の調査(調査9)では、慶長3年(1598)の火災もしくは慶長5年(1600)の関ヶ原のものと考えられる焼土層の下で整地層が確認されている。

森島康雄氏は、京都府総合教育センターや桃山高校、桃山町永井久太郎の調査(調査2)で確認した大規模な整地は、豊臣秀吉による木幡山伏見城期の桃山丘陵西斜面で行われた城下町整備に伴うものとし、整地層上面の遺構主軸は、この時期に施工された町割に沿ったもので、遺構方位の異なる桃山高校の整地層下層遺構は、指月城段階のもの³⁾と指摘している。調査9で確認された伊達街道沿いの石垣や石組溝が木幡山伏見城期の整地層上面で成立していることもこの論を補強していると言えよう。

今回の調査で確認された整地層は1時期のもので、また、整地層下面では遺構を検出していない。整地層の年代を示す遺物は出土していないが、周辺調査の事例から今回確認された整地層は、豊臣期木幡山城の城下町整備に伴う可能性が高いと考えられる。

前述したように、当調査地の窪地状地形は自然の谷地形に規制されたと考えられる。調査区1区と4区の整地層上面の標高差は3m以上あるが、調査2や桃山高校の調査例のような大規模な整地を行えば全体で平坦面を形成することもできたはずである。しかしながら、このような3mもの比高差を整地により平坦にした場合、西側端面に崖が形成され、同じ高さの石垣の構築が必要となる。そのような土木工事を避ける為、谷状の地形を残さざるを得なかったのであろう。

最後に調査地は細川忠興の屋敷地と推定されているが、これを証明するような遺構・遺物を確認することはできなかった。今後の調査の課題となる。

註

- 1) 「伏見城跡」『京都府遺跡調査概報第44冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター 1991年
- 2) 「伏見城跡」『京都府遺跡調査概報第59冊』 財団法人京都府埋蔵文化財調査センター 1994年
- 3) 森島康雄「考古学から見た伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』 文理閣
2001年

参考文献

加藤治郎『伏見桃山城の文化史』 1953年

桜井成広『豊臣秀吉の居城－聚楽第と伏見城－』 日本城郭資料館出版会 1971年

圖 版



1 1区全景（北東から）



2 1区南西壁断面（北東から）



3 2区全景（北東から）



4 2区南西壁断面（北東から）



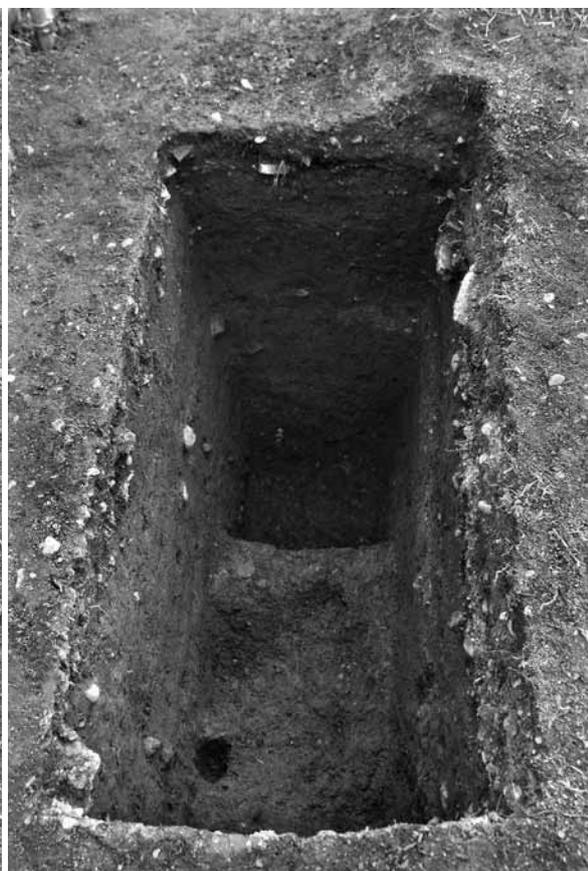
1 3区全景（北東から）



2 3区南西壁断面（北東から）



3 4区全景（北東から）



4 4区南西壁断面（北東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2018-2							
編著者名	松永修平							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2018年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとし ふしみく 京都市伏見区 ももやまながおかせつちゅう 桃山長岡越中 ひがしまち 東町	26100	1172	34度 56分 25秒	135度 46分 12秒	2018年4月 16日～2018 年4月25日	8 m ²	JR奈良線 複線化 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伏見城跡	平城跡	安土桃山時代	整地層、土坑		土師器、瓦質土器、軒丸瓦			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018-2

伏見城跡

発行日 2018年8月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961